

出来事ファイル (No.22-5)

■自転車乗入禁止キャンペーン

元町商店街では3月24日(木)午後3時から、コロナウイルスのため中止していた自転車乗入れ禁止キャンペーンを再開した。同日は商店街関係者が集まり「自転車は押してくださいね」の全丁統一看板配置を記念して、自転車乗入れ禁止旗を掲げるとまきちゃんを描いたキーホルダーを道行く人に配布、広く元町商店街をアピールした。



■「まちなね」案内

神戸市都市局まち再生推進課が、こうべソーシャルマガジンとして「まちなね」を発刊している。第8号の1面をかざるのは「まちづくり」ってどんなもの。神戸市と地域のみなさん、まちづくり専門家が協働でとりくむものづくり・ルールづくり・魅力づくりの手順を簡潔に紹介する紙面のほか、2面では、まちづくりにとるくむ人物紹介、3面にまちづくり会館を紹介、4面ではホームページやSNSを活用して活動状況をつたえる協議会を紹介する。



■クリーン作戦レポート

4月6日(水)、もともちハーバー懇談会では正午12時から、2つのグループに分かれハーバーロードから神戸駅前までの地域を対象にクリーン作戦を実施した。ネットトヨタ17名、エスタシオン・デ・神戸、ホテルJURAKU合せて8名が参加した。



□岩合光昭 チャリティー写真展

「ねこと半世紀、いい子ばかりです」岩合光昭がこれまで全国の展示場で開催してきた写真展作品から人気作品を選び、オークション形式で販売します。オークション売上げの一部を(公社)日本動物園水族館協会に寄付し、野生動物保護を支援します。オークションへの参加は、展示場への入場が条件です。観覧ご希望の方は、ハガキに住所・氏名・年齢明記の上、編集部まで。先着順2名の方にペア招待券をお送りします。会場：阪急うめだ本店9階 阪急うめだギャラリー 会期：5月18日(水)～6月13日(月) 時間：午前10時～午後8時 催し最終日は午後6時閉場(入場は閉場の30分前まで)



岩合光昭 チャリティー写真展
いい子ばかりです
©Mitsuaki Iwago



発行:みなと元町タウン協議会 住所:〒650-0022 神戸市中央区元町通3-13-1協和会館内 発行人:奈良山喬一 編集人:岩田照彦 電話・FAX:078-391-0831

ウクライナに広がるひまわり畑

元町映画館 支配人 林 未来



1970年の初公開から50周年 日本で大ヒットした恋愛映画の金字塔 戦争で引き裂かれた男と女の悲しい愛の物語が、再びスクリーンに

2022年2月24日、ロシアがウクライナに侵攻し、戦争が始まった。侵攻理由に疑問が残ることや(“納得のいく”侵攻理由などはあり得ないのだが)、子どもをはじめ市民の犠牲が増え続けていることで、国際社会の激しい反発を招いたロシアは、世界の中で孤立状態となっている。この戦争はどこへ向かうのか、どう世界を変容してしまうのか、不安しか浮かばず落ち着かない日々を過ごしている。ましてや突然日常が奪われ、生活圏が戦地となってしまったウクライナの人たちのことを思うと胸が痛む。

戦争が生み出すもの、それはただ破壊である。建造物も、生活設備も、景観も、人々のコミュニティや人と人との関係も、思想も、未来も、人生すべてを破壊する。そんな戦争がもたらす悲劇を、映画は何度も描いてきた。

イタリアの名匠ヴィットリオ・デ・シーカが1970年に発表した『ひまわり』も、そんな傑作のひとつだ。イタリアを代表する俳優マルチェロ・マストロヤンニとソフィア・ローレンが、第二次世界大戦により引き裂かれた夫婦を演じ日本でも大ヒット、今でも語り継がれ愛され続けて



ナに言う。「イタリア兵とロシア人捕虜が埋まっています。ドイツ軍の命令で穴まで掘らされて。ご覧なさい、ひまわりやどの木の下にも、麦畑にも、イタリア兵やロシアの捕虜が埋まっています。そして無数のロシア農民も、老人、女、子どもたちも」。一面のひまわりの美しさに目を奪われていた観客に、戦争の残酷さを突きつける衝撃的なシーンである。まさかこれが、現実のものになろうとは…。

戦争で犠牲となるのは、いつも(普通の人たち)である。普通の人たちの普通の日常が奪われる、その悲しみこそが戦争の被害の本質だと思う。いつもの通勤路を歩くこと、お気に入りの喫茶店、春に一杯、見慣れた駅のホーム、他愛ないおしゃべり、大切な人と過ごす時間…。命を奪われることは言うまでもないが、生き残った人たちにも二度と取り戻せない喪失があるということを、『ひまわり』はまざまざと伝える。たとえひとりの死者も出さなかったとしても、犠牲者のない戦争など存在しないのだ。

今回の『ひまわり』上映では、売上の一部はウクライナの人道支援の寄付にあてられる。私たちと同じ普通の人たちが奪われた日常に思いを寄せ、戦争について改めて考える機会としたい。

ナに言う。「イタリア兵とロシア人捕虜が埋まっています。ドイツ軍の命令で穴まで掘らされて。ご覧なさい、ひまわりやどの木の下にも、麦畑にも、イタリア兵やロシアの捕虜が埋まっています。そして無数のロシア農民も、老人、女、子どもたちも」。一面のひまわりの美しさに目を奪われていた観客に、戦争の残酷さを突きつける衝撃的なシーンである。まさかこれが、現実のものになろうとは…。

戦争で犠牲となるのは、いつも(普通の人たち)である。普通の人たちの普通の日常が奪われる、その悲しみこそが戦争の被害の本質だと思う。いつもの通勤路を歩くこと、お気に入りの喫茶店、春に一杯、見慣れた駅のホーム、他愛ないおしゃべり、大切な人と過ごす時間…。命を奪われることは言うまでもないが、生き残った人たちにも二度と取り戻せない喪失があるということを、『ひまわり』はまざまざと伝える。たとえひとりの死者も出さなかったとしても、犠牲者のない戦争など存在しないのだ。

今回の『ひまわり』上映では、売上の一部はウクライナの人道支援の寄付にあてられる。私たちと同じ普通の人たちが奪われた日常に思いを寄せ、戦争について改めて考える機会としたい。



神戸元町商店街 楽市楽座 情報 5月

◇こうべまちづくり会館ギャラリー(無料) TEL361-4523

- 5月 5日(木)～5月10日(火)木曜会作品展
- 5月12日(木)～5月17日(火)彩悠会展
- 5月19日(木)～5月24日(火)旅の写真展
- 5月26日(木)～5月31日(火)アートフォーラムアルベジオ合同作品展(展示:5月27日～)

◇元町映画館(有料) TEL366-2636

- 4月30日(土)～5月 2日(金)『ゲッベルスと私』
- 4月30日(土)～5月 6日(金)『イスラーム映画祭7』
- 4月30日(土)～5月13日(金)『戦慄せしめよ』
- 5月 3日(土)～5月13日(金)『ユダヤ人の私』

- 5月 7日(土)～5月13日(金)『吟ずる者たち』「映画チア部selection ショートフィルム・アソート」
- 5月 7日(土)～5月20日(金)『オーストリアからオーストラリアへ～ふたりの自転車大冒険』
- 5月14日(土)～5月20日(金)『ひまわり』
- 5月14日(土)～5月27日(金)『ルイス・ブニュエル監督特集 男と女』
- 5月21日(土)～5月27日(金)『タヌキ社長』
- 5月21日(土)～6月 3日(金)『ひかり探して』
- 5月28日(土)～6月 3日(金)『20世紀ノスタルジア』
- 「森田芳光70祭 2022」
- 【予定は変更になる場合がございます】

柴町通クリーン作戦

柴町通まちづくり委員会は、4月8日(金)10時から10時30分まで、柴町通を中心に、ゴミ拾いと不法ビラ撤去、自転車・バイクなどへの不法駐輪警告チラシ取り付け作業など、柴町通クリーン大作戦を実施した。参加者は、(元栄海三丁目協和会)奈良山喬一、(株イーエスプランニング)西晶子、(神戸市)西尾俊広・重久遼子、(こうべまちづくり会館)木原正剛、(県信サービス(株))井上知長、(神明倉庫(株))藤尾憲弘・大西登記子、(神明ホールディングス)厚海徹、(大一産業)渡部友貴、(のじぎく興産)藤原誠、(兵庫県信用組合)福島盛久・西海由希子・藤本吉英、(広島銀行)曾我部真介、(新光明飾(株))中川俊・藤田直之・篠原博明・西村友博・大森貴美子、(佐田野不動産(株))佐田野宏之、以上21名のみなさんでした。毎月第2金曜日午前10時、柴町通6丁目佐田野不動産前集合の上、実施しています。お気軽にご参加ください。



編集後記

3月、本紙は1991年3月、第1号を発行した。2021年4月に360号達成、と思っていたら、2022年5月号で357号。調べるに、初代・坂田道治編集長は、創刊号から1993年11月、30号を発行するまでに数回の休刊月がある。現編集者の発行は1994年1月号から現在に至るが、タウン協議会とともに商店街の事務局業務も担当していた時代、2004年3月まで「KOBEBE MOTOMACHI」新聞を商店街に引き継ぐまで製作発行していたこの時期、本紙は2カ月に1度の発行になり、その間の発行回数削減によるものだったことが明らかに。長い道のりでした。

海という名の本屋が消えた（102）

平野義昌

元町駅周辺(8)

駅周辺教育・行政施設の面影を訪ねてみる。

●パルモア病院

JR元町駅東口北側の横断歩道を渡ると鯉川筋の西の道が細い道、南の穴門筋から続いている。もうひとつ西のビル壁面に「兵庫縣立神戸商業學校發祥地」の碑がある。北長狭通4丁目、明治の初め関戸由義が土地を提供するなど、多くの学校が誕生した場所だ。坂を登ると、今も専門学校や兵庫県私学会館など教育関係のビルが目立つ。「パルモア学院」(2007年に神戸駅近くの相生町に移転)を母胎とする「パルモア病院」もある。産婦人科と小児科が一体になった日本初の周産期専門病院である。地元新聞記者の取材本やNHKテレビ番組で全国に知られるようになった。

1947(昭和22)年、石井卓爾(1891～1961年、戦前関西学院、神戸商業大学教授)が「パルモア学院」院長に就任。敗戦後の衛生環境が整わない時期、働きながら学ぶ学生たちの健康状態は良くなかった。49(昭和24)年頃から、医師資格を持つ宣教師が学生たちの診察をした。学院創立者W・B・ランパスによる医療伝道の伝統が生きていた。

石井の義弟・三宅廉京都府立医科大学教授(1903～94年、神戸市生まれ、小児科医)が日曜日に京都の教会で無料診療奉仕をしていた。石井が「パルモア学院」での診察を依頼したところ、三宅は内科医とレントゲン技師を連れ来神。学院内のチャペルの時間にビラをまくと100人が受診した。結核の学生が多くいた。戦中、石井の子息二人も結核で命を落としていた。

石井は無料診療を継続するが、学院は多額の経費を負担しなければならぬ。理事たちの反対意見の中、それでも地域に医療活動を広げるため診療所開設を計画した。

三宅には学生時代から小児科と産婦人科一体の病院という理想があった。戦後、乳児の死亡率は改善されていたが、分娩前後の新生児期の死亡率は高かった。妊娠が始まった時から生命を診るべきと考えた。両科の連携は考えられない時代だった。

三宅は大学を辞し、石井と行動を共にする。

1951(昭和26)年10月「パルモア診療所」発足。石井はパンフレットに、学院は隣人愛をなおざりにした、と反省を書いた。〈……かくて本学院はこのたび過去の欠陥に鑑み、今回新たに診療所を設け、社会奉仕の一端を担おうとするものである。(中略)それは懇切にして正確な診断と良心的な治療を行うことを主眼とする〉^{註1}

学院は所有地150坪を診療所に無償貸与し、高額な医療機器を設置。宣教師・職員・同窓会が現金を寄付、また貸与し、学生たちは体重計を寄付した。建物は木造40坪、1階内科、2階小児科。医師3人(1人は週1回滋賀県から)、看護師1人、事務員1人、全員クリスチャン。経営が軌道に乗るまで5年かかった。それでも利益は出ない、ギリギリの状態。石井と三宅は学院理事たちの批判を受けながら、お金の工面と激務に耐えた。三宅は複数の病院で診察を手伝った。他の病院から幾度もスカウトされたが、理想を貫く。ふたりは銀行から5百万円の融資を仰いだ。

56(昭和31)年1月、診療所隣の空き地に「パルモア病院」開院。木造61坪、ベッド数21。小児科医、産婦人科医、内科医(週1)、助産婦、看護師、事務、薬局、厨房担当ら11名。顔ぶれは少々替わったが、今回も全員がクリスチャンだ。同時

期に三宅が準備を手伝った大阪の病院が教団の多額援助で発足していた。最新設備、ベッド数500の総合病院だ。それに比べると小さな病院である。

〈木造二階建てのその粗末な病院は、医学関係者はともかく、地元の神戸市民にもほとんど知られず、ひっそりと建った。だが、この小さな病院こそ、世界で初めて実現した周産期医療病院であった。(中略)人間が誕生するときの深淵な危機。新生児こそ人間の原点であり、やり直しのきかない人生のスタートだ。その誕生前後の細心の配慮は、産婦人科と小児科が同時に見守る周産期医療でしか出来ない。(後略)〉^{註1}

病院の評価は高まるものの、2000年代に入ると学院との対立は深まり、ついには袂を分かってしまう。

●神戸幼稚園

「パルモア病院」西隣に神戸最初の幼稚園「神戸幼稚園」がある。1887(明治20)年、小磯吉人(よしたり、1857～1926年、補註1)と佐畑信之(長州藩出身、生年不明、補註2)が主唱して「私立神戸幼稚園」を開園。ふたりは八百屋の前で子どもたちが腐った果物をあさって食べているのを目撃。家庭に代って幼い子らを保育し、健康を守り、良い習慣を養えば、天真を發揮し良い国民となる、という信念を持った。小磯、佐畑に加え、内海忠勝兵庫県知事夫妻らが創立委員に名を連ねた。発起人には小寺泰次郎(旧三田藩藩士、志摩三商会)、村野山人(神戸区長、鉄道会社経営、村野工業高校創立)、光村弥兵衛(海運業)らの名がある。特に光村は、経費不足の時は援助を「二年間必之を負担」^(註2)と約束。必要費用は「広く区内有志の寄付をつつの」^(註3)を基本に、県から150円(英国曲馬団興業借地料)を得た。内海夫人らが寄付集めに奔走し、3千2百円超を集めた。土地は北長狭通6丁目、県が468坪(無代)を提供、隣接の九鬼家所有地75坪を借用した。小磯園長、小松原松枝保母、小磯の妻英子と神中夏子(創立委員)が手伝った。園児60名。200名収容可能のところ、当初65名程度で推移し、保育料だけでは経営を賄えず寄付金に頼らざるを得なかった。

88(明治21)年佐畑が第2代園長就任。「幼稚園保育伝習所」を設立、志願者3名、小松原が指導した。93(明治26)年佐畑死去し、小磯が園長再任。98(明治31)年九鬼家が土地を売却。新地主から明け渡しを要求されたことを機に、小磯は敷地・建物・什器一切を神戸区有財産に寄付(1万6千円超)した。結果、園は「神戸尋常高等小学校附属幼稚園」となる。1902(明治35)年独立して「神戸市立神戸幼稚園」と名称を変更した。

45(昭和20)年3月の空襲で園舎焼失、6月廃園。48(昭和23)年4月「神戸小」校長が幼稚園復活を提唱。同校内の進駐軍チャペルを借用し、保護者らの寄付により「私立神戸幼稚園」として再出発した。市の戦災復興は義務教育優先だった。保護者・地域の協力を得て「神戸小」隣地に土地を確保。49(昭和24)年市議会で園舎建設請願が採択され、52(昭和27)年完成した。

●兵庫県公館

「神戸幼稚園」北側下山手通4丁目に「兵庫県公館」＝旧「兵庫県庁」がある。1899(明治32)年起工、1902(明治35)年完成。フランス・ルネサンス様式、レンガ造り二階建て。工費(予算)は34万円超。設計者は山口半六(1858～1900年)、松江藩出身。父は兵学者。藩校でフランス語を学び、大学南校(東京大学の源流)を優秀

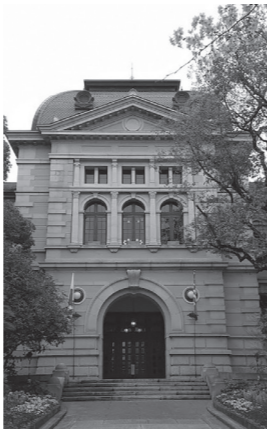
な成績で卒業。1875年から81(明治8～14)年までフランスに文部省給費留学、建築学を学んだ。帰国後、郵便汽船三菱会社に勤務し、支社ビルを設計。のち文部省技師となり、学校建築を担当した。

〈……帝国大学工科大学および理科大学科学教室、また時計台で有名だった一高から五高までのすべてのナンバースクールの建築やキャンパス設計に携わった。〉^{註4}

1890(明治23)年、東京音楽学校(現東京藝術大学)の奏楽堂(講堂兼音楽ホール)を設計した。その後、肺結核のため退官。須磨・舞子で療養しながら大阪の建設会社にも勤めた。大阪や長崎の都市計画を指導し、兵庫県から県庁舎設計を依頼された。山口の業績は「芸術的天分の豊かな建築家」「作風は規矩端正、よく西洋建築の真髄を体得し、その上に自らの個性を盛った」と評価される^(註5)。「兵庫県庁」は「フランスの正統を伝え、かつもっとも円熟の境地を示したものだが、作者の風格は規律厳格な正面よりむしろ自由闊達な背面において見るべきであろう」^(註5)と言われる。1900(明治33)年8月、山口は長崎出張から戻った直後急逝した。「兵庫県庁」完成を見ることができなかった。

45(昭和20)年3月17日、「兵庫県庁」は空襲を受け、壁を残すだけの姿になった。戦後撤去の声もあったが、県議会は「明治の遺構として修理保存すべき」と議決^(註5)。完全復元ではないが修復され、52(昭和27)年県庁分館として復活(写真)。85(昭和60)年県政資料館・迎賓館「兵庫県公館」となった。

^{註1} 中平邦彦『パルモア病院日記 三宅廉と二万人の赤ん坊たち』新潮社 1986年
^{註2} 『神戸区教育沿革史』(神戸小学校開校三十年記念祝典会、1915年)復刻版 第一書房1982年
^{註3} 『神戸幼100年』神戸市立神戸幼稚園1987年
^{註4} 森まゆみ『明治東京崎人傳』新潮社1996年
^{註5} 滝沢真弓『兵庫県・旧庁舎』(「建築と社会」1961年10月号抜刷、日本建築協会)
写真 現在の「兵庫県公館」正面玄関
補註1 吉人は山城国淀藩出身、内務省衛生試験所から兵庫県医業学校教諭、神戸病院薬局長、神戸市衛生局長を経て、大日本製薬に勤務、のち社長。西洋画家・小磯良平の養父。良平の実父は旧三田藩士「岸上文吉」。美術関係者の資料には「きしのうえ」とある。神戸市立小磯記念美術館の英文案内では「Kishigami」だが、「きしがみ」は通称。岸上家と小磯家は小寺泰次郎を通じて親戚。文吉も志摩三商会勤務、母は小寺の妹。吉人の妻は小寺の娘。吉人が病に臥し、良平は22歳で小磯家の養子に入った。
補註2 佐畑は工部省で鉄道建設、神戸電燈会社委員長、神戸市芸学校校長など、官・民・教で活動。1890(明治23)年の第1回衆議院議員選挙に兵庫県第1区から出馬するも落選。
その他参考文献 『神戸小学校五十年史』1935年



みなとMOIOMACHiケンチクさんぽ vol.10

公益社団法人 日本建築家協会 近畿支部

兵庫地域会 地域まちづくり委員会

間にある都市

みなと元町界限について、何かかいてみるというお題をいただき、最初に頭に浮かんできたことは、あの界限を歩いていると、不思議と神戸の街のイメージがなんとなく頭に広がるような気がするという根拠のない経験的実感であった。取り立てて特徴的な建築物や通りを構成する要素があるわけでもなく、比較的雑多に見える通りであるにもかかわらず、神戸という都市の持つ何か骨格のようなものが感じられる気がするのである。そこで、今回このようなお題をいただいたことをきっかけに、この認識のメカニズムに対する仮説を立てることをひとまずの目標と定めることにした。

神戸の街の骨格のようなものが感じられるという以上、まずは神戸の街を俯瞰してみる必要がある。特にみなと元町界限を含む、神戸の現在の都心として機能する街を俯瞰して見ることから始める。かつて生田川の堤広場である東遊園地を包含するフラワーロードが都心の南北軸を形成しており、その西側には固有の歴史を内包した旧居留地が存在し、壁面線がストリートを構成する街区の成り立ちは健在である。旧居留地から鯉川筋を境に西に広がる南京町は独特な様式的装飾と熱気があふれるチャイナタウンである。南に目を向けてみれば京橋以南には過去には世界的なコンテナ港として君



北には六甲山を望み、中華街が口をあけている

臨し、その遺構をとどめた港が広がっている。このように記述してみると、改めてなんと多様な個性的な街の粒が同居していることであろう。それぞれに歴史的背景に裏打ちされた個性的な街の粒がモザイク状にひしめきあっているのである。まさにこのことが神戸の都心を形成する街の特徴の一つであるといえるのではないだろうか。

改めて、みなと元町という場所を、このようなモザイクの中で眺めてみると非常に特徴的な立地特性を持っていることが見えてくる。つまりこの界限は、東に旧居留地、北に南京町、南に港と様々な特徴的な街の粒である、多様なモザイクの接点に位置していることがわかる。改めてそのような視点でみなと元町を歩くと、様々な街の粒が顔出しする特徴的な通りの面白さを味わうことができた。通りの先にまるで異世界へ誘うかのような南京町の門が口を開けていたり、旧居留地の建築群が上空を覆っていたりもする、いうなればモザイク都市の粒たちが顔みせするハブのような役割をはたしていると言えそうだ。このような街のハブであることは、ミクロな路上観察的視点から、通りを構成する個々の要素からもうかがうことができる。旧居留地の様式性に引っ張られたような部分的な石のファサードやアーチ窓があるかと思え



東に旧居留地を望むことができる

ば、いかにも中華を思わせる赤い提灯の装飾などがそれにあたる。

さらに、改めて通りを歩く中で、交差点にたつてあたりを見回してみると、南側に目を向ければ、港の気配をはっきりと感ずることができ、北側には六甲山の緑を望むことができる、この通りは神戸の地勢を見通すことのできるピスタとなっていることに気が付いた。つまり、このみなと元町を歩く経験は、私たちに海と山をつなぐ地勢の中に、個性的な街の粒が面的に広がりモザイク状にひしめき合っているという、現在の神戸の都心を形成する骨格と呼べそうな様相を浮かび上がらせていると言えるのではないだろうか。このようなメカニズムによって、私が最初に想起した都市のイメージが浮かぶ場所になっていると言えるのではないだろうかという仮説を立てるに至った。

トマス・ジーバーツは田園地域の海にまるで群島の様に浮かぶ多数の都市というイメージを「間にある都市」という概念として書き出したわけであるが、まさに神戸という都市にこのイメージを相似形に当てはめてみると、みなと元町という場所に、ひしめく街の粒の間に浮かび上がる、間にある都市としての固有の粒がまた一つ浮かび上がって見えてくるのである。



南に港を感じることができる



畑 友洋 (はた ともひろ)

株式会社畑友洋建築設計事務所主宰

／神戸芸術工科大学准教授

／京都大学非常勤講師